
シロアオキアカミドリクロ

アエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シロアオキアカミドリクロ

【Nコード】

N1575C

【作者名】

アエン

【あらすじ】

詩のような気もしますが、一応小説カテゴリーで。

(前書き)

イメージの塊。ストーリーはありません。

白い世界。

上下左右、三百六十度と三百六十度、どこまでも続く白い世界は、歩いてても歩いてても、ただただ白い地平が見えるばかり。

地面は丸いのか四角いのか、平面なのか立体なのか、線なのか点なのか、歩いている自分にもわからない。

私の格好も、白い。着ているものも、履いているものも、肌、髪の毛の色も、白い。

白、白、白。

なぜ白い？

白い世界で白いブロックにぶつかった。

一辺が二メートル程の立方体。

白い世界にぽつんと佇んでいる。

その寂しげな前面を撫でると、立方体は飛んでいった。

数百メートル飛んでいった。

立方体はコロコロと転がり、立ち上がると、悲しげに、すごすごと何処かへ去っていきこうとする。

いきなり触るなんて、どうかしている。私の頭は狂ってしまったのだろうか。

謝ると、立方体は微笑んで、白い地面にずぶずぶと沈んでいった。

罪滅ぼしに、その上を歩く。

そこから先、足下が柔らかくなっていった。

気をつけないと、一瞬で沈んでしまう。

白い四角は許してくれないらしい。

沈んだ気分で見上げたのに、白いバケツは浮いていた。

バケツからは白い糸が垂れ下がっている。

手をのばし、糸を引く。

するとバケツはひっくり返り、青い液体をどくどくと流し始めた。

長い時間をかけて、世界は三百六十度と三百六十度、青に染まった。バケツは色を使い果たしたのか、黄色くなっていた。白い私は青い世界を進まなくてはいけなくなつた。

黄色いバケツを見ると、バケツはふるえて丸くなり、上方へ飛んでいった。

みるみる上昇していった。

青い空に、黄色い染みができた。

青い世界は白い世界よりも進みづらかった。

足が張り付き、どうも歩きづらい。

ふと見ると、足がつけ根までズクズクと、青に染まっていた。

あれからの二千十三万八千七十三歩の間に、

足が青を吸ってしまったらしい。

しほればジュウジュウとできそうだ。

ふりかえると、白い足跡がずらりとならんでいる。

間違えた。

青を吸ったんじゃないやなくて白を置いてきたのか。

試しに後ろ向きに二歩歩いてみると、白は返してもらえた。

しかし三歩目で飽きてしまった。

しかたがないので足をしぼる。

やはりジュウジュウとでてきた。

すべてだし終えると、足はすっかり白く軽くなった。

青い世界はなかなかやさしい。

しかし、私はなにをしたいのか。

後ろから、赤い丸いモノがフワフワと飛んできた。

ちょうど、私の手のひらくらいの大きさだ。

こんにちは、と声をかけると、さようなら、と返された。

帰るのかい、とたずねると、赤は小さく頷いた。

気をつけて、と手を振ると、気をつけて、と返された。

私も帰ろう。

緑の雨が降ってきた。

緑の雨は強烈だ。

容赦なく、ザンザンと私の体を打ちつける。

私の体は全身すっかり緑に染まってしまった。

しようがないので、雨宿りが出来るところを探す。

が、いくら見回しても地平線を遮るモノは何もない。

ならば雨の上にいこう。

止まっている雨粒を選びその上を歩く。

慣れれば階段のようで、スイスイと進めた。

雨の上に着くと、雨の親がいた。

雨の親は、私を見て怯えているようだ。

私は体を絞り、緑の子を返す。少し白が混ざってはいるが、緑の親は喜んでくれた。

受け取った緑の子を、緑の親は小さくちぎり、青い世界へばらまいた。

緑はヒラヒラ、青い世界へ飛んでいく。

緑の親は願いを一つ聞いてくれるというので、世界を白に戻してほしいと頼んだ。

しかし緑の親は悲しげに、それは無理だとつぶやいた。

そうだった。

白など、最初からない。

最初すらない。

世界もない。

緑の親が消えた。

緑の子も消えた。

赤い丸も消えた。

青い世界も消えた。

黄の染みも消えた。

白い私も、消えた。

世界は真っ黒になった。

(後書き)

わけわからん、という感想で正解です。
こつこつのもいいですね。

たまには

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1575c/>

シロアオキアカミドリクロ

2010年12月11日15時20分発行